

家庭、学校、会社…少なくとも表向きには従わなければならない対象が増えていくなかで、「誰を本当の我が人生の頭、導き手とするのか」ということは自ずと問われてきます。その答えが明確でないのは、例えば次のような現実があることを知っているからでしょう。幼子にとっての頭である親から、「お前を産まなければ良かった」と言われ、捨てられる。競争市場から、「お前は役立たずだ」と、存在価値を否定される。そして、自分自身が自分の存在を否定し、命を絶つ。これらは、生まれた国や育った環境によって大きく左右される、誰しもが例外ではない事柄です。さらに現代は、これまでの歴史が問い直され、価値の多様化が認められるようになってきた分、個人主義的傾向も強くなり、何が大切なことなのかが見えにくくなっている時代でもあると言えます。

ルターは、『キリスト者の自由』という名著を残しました。そのなかで彼は、キリスト者がイエス・キリストなる神を頭としているが故に、誰にもその心を支配されない自由を得ており、同時に、その自由の使い道については、「隣人を愛し、敵を赦せ」と命じる神に従わなくてはならない拘束性を持っていることを示しています。

本日の聖書箇所において、ヨセフは「夢で天使が告げた」と表現される神の言葉を根拠に、妻マリアと幼子イエスを連れて、行動していることが分かります。「男だから」「夫だから」「一家の大黒柱だから」…そういう時代精神からではなく、神の言葉に従って妻子を守ろうとするヨセフの姿を聖書は伝えているのです。もちろん彼は、感情的に妻と子を愛していたでしょう。しかし、その家族の支配からもヨセフは自由なのであり、神にのみ、その心を支配されるのです。これは当然、ヨセフだけでなく、マリアにも、幼子イエスにも言えることです。そして教会もまた、時に間違っただ道に迷いながらも、キリストなる神を頭として歩み、そこに立ち返ることで、滅びることなくこの世に立ち続けてきました。それは、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」（マタイ 24:35）、「信仰と希望と愛、この三つは、いつまでも残る」（1コリント 13:13）と、神がイエスやパウロを通して「言われていたことが実現するためであった」（15 節）からでしょう。かつてヨセフが見た神の成し遂げるみ業を、私たちも今、ここに見ているのです。

この一年、誰を我が頭、導き手として歩むべきでしょうか…それは、私達の人格に大きな影響を与え、その後の生き方・あり方を方向付けていきます。

（文責：望月達朗牧師）

